

*Armes Prydein* ついて  
*Armes Prydein*  
Jiro Yoshioka

吉岡 治郎

この 198 行の詩の写本は、著名な *The Book of Taliesin [Llyfr Taliesin]* に含まれている。この写本の年代は、現在では 14 世紀初頭のものでされている。この写本を出版した Gwenogvryn Evans (1852-1930) が 1275 年とし、ながらくその見解が流布していたので、古い書などでは今なおその年代を記しているものもある（古い書物には、その年代を採用しているものが多い）。W.F. Skene (1809-1892) の *The Four Ancient Books of Wales* (2 vols., 1868) にも収録されている。この本は、AMS Reprints にも含まれており入手が便利になったが、Skene のこの本で与えられている訳は 20 世紀の学問的水準から見れば全く評価することはできないので、使用することは避けるべきである。

この詩の題 *Armes Prydein* ついては、*GPC* には、Armes は armes, arymes, ermes = prophesy, prediction, portent, omen 引用初例 ; Prydein は

Prydain = (inhabitants of) Britain (sometimes formerly contrasted with England or the English, and sometimes excluding Scotland) とあり、*The Prophecy of Britain* の意味である。

著者については、中世の作品がしばしばそうであるように、「不明」であるが、作品の中に見出される宗教的な言及などから、当時の政治的状況に通じており、学問的伝統を踏まえた南ウェールズの修道士、聖職者であろうかと推測されている。彼は Hywel the Good の臣下であったが、王のサクソン族に対する融和政策に強い反発を表明している。

ウェールズ詩の伝統の一つに Vaticinatory Poems (予言詩) の伝統がある。予言詩は主として政治的なものであり、ウェールズ人とイングランド人、後になればウェールズ人とノルマン人の間の争いについてのものであり、特に Cynan, Cadwaladr, Owain 最後には Arthur などの英雄が復帰して、ウェールズ人を隷従から開放し、イングランド人に復讐をしてくれるという内容になる。これらの詩の内容については、M.F. Griffith の *Early Vaticination in Welsh* (1937) が詳しい。金城学院大学図書館の Ifor Williams Library 「ウィリアムズ文庫」に含まれている。

この詩の制作年代については次のような歴史的事情から推測されている。Wessex の王 Athelston は 926~30 年の頃に、ウェールズの王たちに Hereford で彼に会うことを強要し、服従して貢納することを求めた。これは彼以前の王のなし得なかったことである。南部では、ワイ川 the Wye をウェールズに対する境界として決めた。この詩の内容から判断して、その直後にこの詩は制作されたと考えられている。937 年に the Battle of Brunanburh があり、スカンディナヴィア人、ブリトン人、スコットランド人の軍勢は完敗を喫する。この悲劇的な完敗の後では、ウェールズ人のだれ一人としてこのような詩を制作する勇氣は持ち得なかったであろう。それでこの詩の制作は 937 年より以前に違いないとされている。この見解は Ifor Williams のものであり、ながく支持されていたが、1983 年になり著名なケルト史家 Dumville が、いろいろな資料を分析して、その制作年代をより幅広く 935-950 とする見解を提示した。現在も、見解は二つに分かれたままであり、本報告者は当時のウェールズの歴史、イングランドの歴史に精通していないので、いずれがより妥当であるのかについての判断を下す資格はない。

本詩の 1 行目に dygobryssyn (they will hasten) が出てくるが、この個所では、その they が誰であるかは明らかにされていない。この they に当たる Cynan と Cadwaladyr が初めて姿を現すのは Cadwaladyr (l. 81) Cynan (l. 89) である。この二人の英雄は初期の予言詩に繰り返し姿を現す。Cynan はマ

ビノギオンの第5話 *Breuddwyd Macsen Wledig (The Dream of Macsen Gwledig)* に現われ、ブルターニュ植民地の伝説上の設立者とされている英雄である。一方 Cadwaladyr は *Brut y Tywysogyon (The Chronicle of the Princes)* の 680-682 年の個所でその死が報じられている。何百年も以前の英雄達が窮境にあるブルトンの民を救うために急遽赴き、軍勢を指揮し、サクソン人の加える圧制をはねのけるということである。本詩にあつては救世主としての Arthur は全く姿を現さない。それで別の伝統に属するものと考えられている。

Cymry, Men of Dublin, the Irish of Ireland and Anglesey (?) and Scotland, the men of Cornwall and Strathclyde, the Men of North が馳せ参じ (実際にはこれ程多くの地域の民が一致協力して戦うということは難しいものと思えるが、願望であろう)、ブルトン人が圧制に抗して立ち上がり、サクソン人を追い払い旧地を回復し、自由を獲得する。

本詩は Dygogan awen (The poet's inspiration foretells) で始まり、その後前述の dygobryssyn が続く。l. 107 は同じ表現で始まる。こちらは綴りが異なり、Dysgogan awen となり、その後に dydaw y dyd pan dyffo Iwys y vn gwssyl. (the day will come when the men of Wessex will come together in council,) と続く。l. 171 は Dysgogan derwydon meint a deruyd. (Wise men foretell all that will happen:) とあり、詩の冒頭、詩の中程、詩のまとめに近いところと、予言詩に相応しい語で詩をまとめている。

ll. 87-8 では、Yg koet ymaes [ym bro] ym bryn. / canhwyll yn tywyll a gerd genhyn. (In forest and on plain, on hill (and dale) a candle in the darkness goes with us:) と Cyran を「暗闇におけるろうそく」とする適切な比喩がある。また、ll. 117-122 には、Atui pen gaflaw heb emennyd. / Atui gwaged gwedw a meirch gweilyd. / Atui obein vthyr rac ruthyr ketwyr. / A lliaws llaw amhar kyn gwascar lluyd. / Kennadeu agheu dychferwyd. / pan safllhwynt galaned wrth eu hennyd. (There will be heads split open without brains, women will be widowed, and horses riderless, there will be terrible wailing before the rush of warriors, many wounded by hand; before the hosts separate the messengers of death will meet when corpses stand up, supporting each other.) と戦闘の状況が述べられている。「頭をかち割られ命を失う者おり、ために婦人たちは寡婦になり、乗馬は乗り手を失い戦場をうろつきまわる。命を落す者あまりにも多く、死者が倒れることもかなわぬ程である」との戦場の緊迫した簡潔な描写がある。l. 122 と同じ行は、詩の終わりに近い l. 187 に再度現れる。

今回注解の底本とした Ifor Williams の原著 *Armes Prydein* は 1955 年の刊行である。彼の優れた弟子の一人である Bromwich による英語版も 1972 年刊行である。進展の著しい最近の研究成果（歴史、言語についての）を十分に踏まえた新しい注釈書が、ウェールズの学者達により出版されることが切に望まれる。なお Bromwich による注釈書の Vocabulary には少数の語、語形の脱落、また当該の語の本文中で現れる個所の脱落（もっと多い）が散見されるので注意されたい。

M.F. Griffith: *Early Vaccination in Welsh* は、水谷宏氏のご好意により、今回参照することが出来た。